
プールサイドを濡らす雨

ランプ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

プールサイドを濡らす雨

【Nコード】

N6704C

【作者名】

ランブ

【あらすじ】

憧れの先輩がカノジョにふられたらしいと知ったあたしは、先輩の居残り練習に付き合っって告白のタイミングを窺うが……。場所小説企画参加作品です。(10月23日・加筆修正させていただきました。)

(前書き)

灯夜さんの“場所小説”という企画に参加した作品です。
場所小説で検索すると、ほかの作者さんの作品を読むことができます。

プールサイドを濡らす雨

高校に入って初めて恋ってモノをした。

4月に体育館であった新入部員勧誘会。

そこで、初めて孝介先輩に会った。

会った、というのは正しくないかもしれない。

孝介先輩は、自分が所属する水泳部の紹介をするために、壇上に上がって用意された原稿を読んでいた。

正確には、一方的に“見た”だけだった。

水泳部という割に、日に焼けていない顔と、筋肉のあまりついていないスラリとしたスタイル。

明るい色に変色した髪からだけ、プールの匂いがしそうな気がした。

ただ、それだけのことで、あたしは孝介先輩をもっと知りたくなって、水泳部員になった。

ジャージの裾を膝まで折りあげて、あたしは足の消毒用の水溜りを通り抜けた。

プールに1人残って泳いでいるのが孝介先輩だと、そのフォームを見ればすぐに判る。

孝介先輩のフォームは、あたしの目には力強くてキレイに見えるけれど、水泳部の先輩や顧問の高橋先生に言わせると、「ムダが多くてタイムに繋がらない泳ぎ方」なのだそうだ。

あたしたち水泳部員の夏は短い。

普通の県立高校であるうちの学校には、温水プールはおろか屋内プールもない。

だから、水泳部といっても、実際プールに入って泳ぎの練習がで

きるのは、せいぜい1学期の中間テストが終わる6月のあたまくらいからお盆前までの、2カ月半くらい。

県大会も終わって8月に入ると、わざわざ夏休みの練習に出てくる部員なんてほとんどいない。

おまけに今日は朝からドンヨリと曇っていて、いやいや練習に出て来ていた部員たちも、1人また1人と引き上げていき、最後に孝介先輩が残った。

裸足でプールサイドのコンクリートに踏み出した。

プールサイドは、昨日までの真夏の太陽の熱を残していて、ほんのりと暖かい。

あたしは爪先を立てて、孝介先輩が泳いでいるコースのゴール地点へ早足で歩み寄り、孝介先輩がそこに置いたタオルを手にとった。

泳いでいる孝介先輩の腕や肩や、息継ぎの度に横を向く頭が、透明な水を切り裂くように見える。

太陽が出ていないから、その姿は水面で反射する光に邪魔されることなく、あたしの眼に映り込む。

25mプールの向こう端でターンをして、まっすぐに泳いでくる。まるで、あたしがここで待っているのを知っていて、あたしを目指して一心に泳いでくるようだ。

あたしはドキドキと高鳴る胸に、孝介先輩のタオルを押し当てた。

水飛沫と一緒に、荒い息をしながらプールから上がってきた孝介先輩に、あたしはタオルを差し出した。

「お疲れ様です。居残り練習ですか？ 熱心ですね」

先輩は水泳帽とゴーグルを一緒に外してから、あたしが差し出したタオルを受け取った。

「有沢もまだ残ってたのか？ 早く帰らないと雨が降ってくるぞ」
言いながらあたしから少し離れて、孝介先輩は頭を激しく振って

流れる水を震い落とす。アテネオリンピックで金メダルをとった、おんなじ名前の水泳選手のような。あんなオムスビみたいな頭ではないけれど。

孝介先輩の体から飛び散る雫が、少しだけあたしの白い体操着を濡らした。

そんなつまらないことが、あたしのボルテージを一気に高めていく。

水泳なんて本当は好きじゃない。日に焼けるのは嫌だし、はつきり言ってスタイルはコンプレックスだらけで、水着になるのは恥ずかしい。

だけど、水泳部員にでもならなければ、あたしは孝介先輩と知り合いになることすら不可能だったと思う。

なのに、部員になってすぐ、先輩にはカノジヨがいることを知った。先輩より1つ年上の、髪ヘの綺麗な色の白い女性メ。

そのことを知ったときには、あたしの孝介先輩に対する単純な興味は、好きという気持ちに変わっていた。

カノジヨの存在を知った後で、自分の中の気持ちに気づいたのだから、諦められるはずもなく、あたしの切ない恋は始まった。

だから、あたしの初恋は、“見つめること”だった。

ほとんど毎日のように練習を見に来るカノジヨが、優しく差し出すタオルを受取る先輩の横顔や、そのあと一緒に帰っていく2人の後ろ姿を、ずっと見つめ続けていた。

見つめているだけでいいじゃないって、自分を納得させていた。

先輩がカノジヨにふられたという噂が流れ始めたのは、夏休みに入って間もない頃だった。

あれほど足繁く練習を見に来ていたカノジヨが、県大会の応援に姿を見せなかったことで、周りのみんなはその噂が真実であること

を知った。

失恋をし、県大会のレースでも一勝も挙げることができなかつた孝介先輩は、落ち込んでいるのか、吹っ切るために何かに打ち込みたいのか、毎日こうして居残り練習をしている。

いつもなら、なんだかんだ言いながらも、何人かの男子部員がそんな彼に付き合っただけで最後まで残っているけど、今日は流れの速い雲に追い立てられるようにみんな帰ってしまった。プールには孝介先輩とあかしだけが残された。

今日も孝介先輩が居残り練習をするかどうかは、賭けみたいなものだった。

先輩が他の部員たちと一緒に帰らずに1人になることがあったら、あたしは自分の気持ちを彼に伝えようと決めていた。

あたしは賭けに勝った。

悪いけど、これはあたしにとってはチャンスなのだ。

なんていったって、あたしたちの夏は短い。

夏休みの練習は、プールが使用できなくなるお盆までの、あと1週間とちよつとで終わってしまう。

お盆明けの夏休み後半戦を楽しく過ごすためには、この1週間とちよつとが勝負なのだ。

孝介先輩は、日よけの下に並べて置かれたパイプ椅子に、どっかりと座り込んだ。

荒い息をして、薄く筋肉のついた肩をまだ上下させている。

肩からかけたタオルで頭から流れる雫を拭う。

その腕が上下するたびに、腕の筋肉も躍動する。

水泳部に入ったときは憧れだけだったヒト。

カノジヨがいるって分かってても、その気持ちは私の中でどんどん育って、だけど、見つめることしかできなかつたヒト。

しなやかなその筋肉も、相変わらず薄い色の髪も、今や誰のモノでもなくなつたのだと思つたら、あたしの口からスルリと言葉が出た。

「孝介先輩、その……、カノジヨとの噂、本当なんですか？」

孝介先輩は、タオルで体を拭っていた手を止めた。その肩の筋肉がピクリと動くのがわかつた。

「だつたらナニ！」

答えた声は、当たり前だけど怒っていた。

その声と口調の固さに、あたしは一瞬ビビつたけれど、ここで引くわけにはいかない。

何しろこれは、めつたにないチャンスなのだ。

「噂が本当なら、あたしと付き合ってください！」

あたしは孝介先輩を見つめ、できるだけ言葉を区切らないように一気に言つた。

「入学してから、ずっと好きでした」

あたしの言葉が終わらないうちに、孝介先輩が立ち上がって、隣の椅子にタオルを置いた。

あたしが目を逸らさないから、彼も目を逸らさないのか、彼が目を逸らさないから、あたしも眼を逸らさないのか。

まるで目を逸らした瞬間、何かがはじけて飛びそうな緊迫感の中で、やがて孝介先輩が口を開いた。

「有沢、俺この前ふられたばかりなんだけど……」

「知ってます。でも、ふられたつてことは、今はフリーつてことでしょうか？」

“知ってます”という言葉があたしの口から出た瞬間、孝介先輩が

目を伏せた。

空が一段と暗くなった。

上空から雲のうねる様な音が聞こえる。

本当にもうすぐ雨が降ってくるだろう。

孝介先輩は意を決するのように、もう1度あたしの視線を真正面から捕らえた。

「有沢、ゴメン。俺、ふられたからって、そんなにすぐに気持ち切り替えられない」

その言葉にあたしは俯いた。

何か言葉を探さなければと、あたしは懸命に思考をめぐらしたけれど、言葉が何も見つからない。

心臓がドクンドクンと鼓動を打っている。こめかみが痛くなって、辺りの物音が遠くにかすんでいくようなあたしの耳は、それでも先輩の声を捉える。

「でも、ありがとう。有沢」

そう言い終えると、孝介先輩は椅子の上に投げ出してあったタオルを肩にかけ、水泳帽とゴーグルを手に取った。

「ああ、とつとつ降ってきた」

孝介先輩の言葉に日よけの外を見ると、人のいなくなったプールに雨が波紋を造っていた。

降り出したばかりの弱々しい銀の糸が、プールサイドのコンクリートの色を、濃いグレーに変えていく。

「有沢、傘持ってきてる？」

孝介先輩が優しく尋ねてくれる。

あたしは先輩の顔を見ずに頷いた。

「送ってやれないけど、気をつけて帰れよ」
ぎこちない微笑と共に、その言葉を残して、先輩はプールサイドを歩き出した。

何か言わなければいけない。

そうでなければ、あたしの初恋はこれで終わってしまう。

今さつき自分がふった女の子に対して、こんな自然に優しい言葉をかける先輩を、やっぱり好きだと今でも思う。

何をどうすれば良いのかわからないけれど、取り敢えず孝介先輩を引き止めたい！

あたしは雨をもともせず、孝介先輩の後を追いかけて、その背中に向かって叫んだ。

「あたし、諦めませんから！」

絶叫したつもりだけど、のどがカラカラに渴いていて、あまり大きな声を出せなかった。

それでも孝介先輩は雨の中で歩みを止めた。

「先輩に別のカノジョができて、ずっと好きです」

プールサイドに立ち止まったまま、振り返らない背中に向かって、あたしはなおも続けて言い募った。

孝介先輩がゆっくりとあたしを振り返り、引き返してきた。

これは効果があつたということだろうか？ ちよつとは、あたしの気持ちに答えようとしてくれているのだろうか？

先輩はプールサイドをズンズンと歩いてきて、あたしの真正面に立ち、あたしの肩に手をかけた。

「有沢、ありがとう！」

正面から見た孝介先輩の頬は、心なしか上気して赤く見えた。

その興奮した口調のまま、熱っぽく真正面からあたしに囁きかける。

「そつだよな！」

？

“ソウダヨナ”???

孝介先輩の口から出た言葉は、なんだかちょっとあたしの予想に反していた。

そんなあたしの反応なんて気に留めることもなく、先輩は興奮したまま、あたしの肩にかけた手を放して、雨が降ってくる空を見上げた。

「そつだよな。ほかに好きな人ができたって言われたからって、諦めなきゃいけないなんてことないよな！」

上を向いた孝介先輩の顎から、雨の雫が滴り落ちる。

いつの間にか拳に握られた、さつきまであたしの肩に置かれていた左手からも、雫は滴っていた。

その雨の雫になりたい、なんて思っている場合じゃない！
事態はなんだかあたしの予想を大きく裏切っている。

「ほかに好きな人ができたってカノジヨに言われて、俺、諦めるしかないんだって思ってたけど、そんなこと関係ないよな。あいつにほかに好きな人ができたって、俺の気持ちは変わらないんだから、諦めることなんてなかったんだよ」

孝介先輩は、まるで熱に浮かされた様に瞳を潤ませ、両手を強く握り締めていた。

!?

あたしはこの成り行きがよく理解できないでいる。

「でも、孝介先輩、カノジヨにふられたんですよね？ だったら、追いかけるより、違う恋を探したほうがよくないですか？」
全くバカなことを口走ってしまった。

先輩はまるで、今、あたしが目の前に居るのに気がついたかのようにあたしを見、魅了されるような笑顔を満面に浮かべた。

「ふられても諦めないって、今、有沢が言ったんじゃない？」

その言葉で雷に打たれたように固まってしまった体の変わりに、あたしの頭はゆっくりと事態を理解し始める。

「俺、追いかけたり、粘ったりするのって、男らしくないって思っ
て、諦めろって自分に言い聞かせてたけど、そんなことないよな！
？ 自分が納得できないのに、一方的に終わりにされて諦めるなん
て、そっちの方が男らしくないよな？」

孝介先輩の熱っぽい語らひは、あたしには絶望的な言葉だ。

取り敢えず、あたしの気持ちに答えようとは、これっぽっちも思
ってないらしい……。

「ありがとう、有沢。ホントに気をつけて帰れよ」

さつきと同じ言葉を残して、先輩は再びあたしに背を向けて、雨
の中を歩き出した。

あたしはその背中を引き止めることができないでいる。

引き止めようとするあたしの言葉が、逆に彼を勇気付けてしまっ
らしいからだ。

夏の雨は、プールサイドのコンクリートからも、あたしの体から
も、孝介先輩の体からも、等しく熱を奪っていく。

それなのに、あたしたちの心から、その熱を奪っていくことはな
いらしい。

憧れた背中とは、プールサイドと外の更衣室とを隔てる、コンクリートの塀を曲がって見えなくなってしまう。

雨に濡れたままその背中を見送って、自分でもしづいと思いつつ、それでも諦めない、あたしは自分の心でつぶやいた。

孝介先輩がそれでもまたカノジョにふられたら、リプレイを申し込んでやる。

(後書き)

読んでくださった皆様、ありがとうございます。

感謝しています。

企画のメ切に追われてしまい、あまりにも納得のいかない仕上がりが
だったため、10月23日、大幅に加筆修正させていただきました。
それより前に、評価・コメントを頂いた諸先生方、この場を借りて
お詫びいたします。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6704c/>

プールサイドを濡らす雨

2009年6月27日21時47分発行